

第36号

年4回発行
無料

創刊 2012年1月16日
発行所 NPO法人 HUG
〒151-0053
東京都渋谷区代々木 2-10-9 8F
e-mail: info@h-u-g.jp

よきことを、よきひとへ。

東北復興新聞

復興現場の今がわかる
「好事例」共有メディア
WEB版▶<http://www.rise-tohoku.jp>

目次

2面 [産業]

[宮城県南三陸町]
生産現場と消費者がつながる、
新しい林業のかたち



4-5面 [特集]

[宮城県女川町]
更地からつくる新しい町
千年に一度のまちづくり
人口減少率日本一からの持続可能性への挑戦



7面 [コミュニティ]

[宮城県東松島市]
住民主導のまちづくり協議会
集団移転に夢を。
日本一住みやすい町を目指す



復興工事の担い手

国道のかさ上げ工事が進む岩手県釜石市。建築のプロ達は自らの受け持つ工事を「未来責任を背負う仕事」と熱く話してくれた。
(釜石市両石地区 戸田・青紀土木特定建設工事共同事業体)

P政策 Policy

Policy
PICK UP
DATA

2014年度補正予算
(東日本大震災復興と区別会計)

2,597 億円

2015年1月9日復興庁発表
うち1500億円が中間貯蔵施設に係る交付金、
1000億円が福島復興交付金(いずれも新設)

【復興庁】ここ3ヶ月の施策のまとめ

復興集中期間あと1年余 価値ある連携ハブとなれるか

連携と 情報発信強化へ 打ち手

震災からあと2ヶ月で4年を迎える。各地で復興住宅や高台移転工事の完成が少しずつ進んでいるが、いまだ23万人を超える人々が避難生活中だ。5年と定められた集中復興期間の最後の1年を控えた復興庁の、この3ヶ月の施策をまとめた。コミュニティや産業などの各分野における施策に加えて、連携の場づくりや情報発信への注力が見える。

新年早々の1月5日、復興庁からの最初のニュースは、ソーシャルメディア「ツイッター」における復興庁公式アカウントの発表だったアカウント: @Fukkocho_JAPAN。ツイッターといえば復興庁は、2013年の職員による不適切発言という苦い経験があるだけに、情報発信強化への本気度がうかがえる。

ツイッター上で日々取り組み状況が発信される中、1月7日にはコミュニティ支援の新しい施策「被災者コーディネート事業開始」の文字がならんだ。昨年11月に発表されたこの事業では、被災者の見守りやコミュニ

販路開拓と プロジェクト支援

産業復興への支援策として、昨年11月には「販路開拓支援チーム」が立ち上がっている。被災地域の基幹産業である加工業においては、設備は戻ったものの売上が回復せず、震災

により失った販路をいかに取り戻すのかが大きな課題となっている。チームメンバーには製造卸・物流小売・金融などから26団体が名を連ねた。参加団体の1つであるスーパーマーケット協会は「結果的に売れることが現場には一番有効」と指摘する。情報共有に留まらず売れるための仕掛けづくりのアクションにつながるか、今後の具体策に注目が集まる。

その他、被災地企業と外部支援企業をつなぎ、連携プロジェクトを生み出す取り組みも継続している。昨年12月に福島県南相馬市で開催された「結の場」は7回目を数え、のべ180を超える支援企業を被災地とつないだ。「企業連携プロジェクト支援事業」により支援した福島県内の事業者からは、新たに商品化された日本酒が発表された。同事業では2012年度以降これを含む24のプロジェクトに対して、助言や指導に留まらない直接的な「ハンズオン支援」を行っている。

復興庁の繰り出す連携の打ち手の数々。連携から生まれた取り組みが価値を生むことが本場のゴールだ。ハンズオン支援を行う復興庁なのか、連携主体の民間団体なのか、個々の取り組みの推進役にも注目してきた。

「販路開拓チーム」メンバー

- 一般社団法人 RCF復興支援チーム
- いわて新事業創造プラットフォーム形成協議会
- 特定非営利活動法人 ETIC.
- キリン株式会社
- Google イノベーション東北
- さんりくチャレンジ
- 信金中央金庫
- 一般社団法人 新興事業創出機構
- 全国水産加工業協同組合連合会
- 東北未来創造イニシアティブ
- 日本加工食品卸協会
- 公益財団法人 日本財団
- 日本スーパーマーケット協会
- 日本百貨店協会
- 一般社団法人 日本フードサービス協会
- 一般社団法人 東の食の会
- 一般社団法人 北海道総合研究調査会
- 一般社団法人 MAKOTO
- 公益財団法人 三菱商事復興支援財団
- ミュージックセキュリティーズ株式会社
- 全国信用協同組合連合会
- 東北イノベーション推進室 (PwC)
- 東経連ビジネスセンター
- 一般社団法人 日本物流団体連合会
- 株式会社 東日本大震災事業者再生支援機構
- 一般社団法人 ワカツク

Business
PICK UP
DATA

住民意向調査から見える福島の避難状況

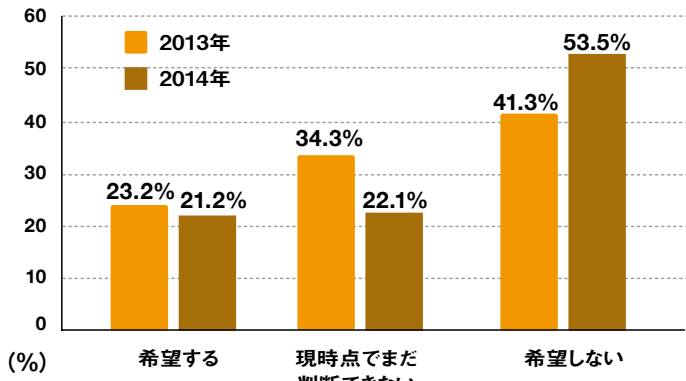
復興庁は原発の被災自治体に対する住民意向調査を2012年から実施しており、3回目となる今年度の調査結果が10月以降、順次公表されている。様々な要因が複雑に絡み合う住民の思いは今――。浪江、富岡、大熊、楢葉、双葉、各町の意向調査をもとに、現在の住民意識と今後の必要な支援を分析した。

避難者の推移 (県調査) (単位:人)

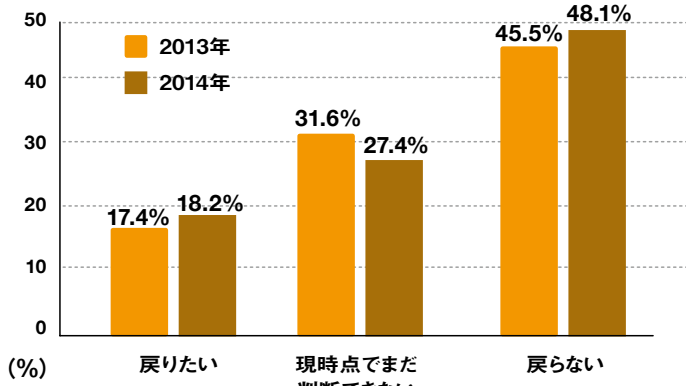
2012年12月	県内98,528	県外58,608	全体157,136
2013年12月	県内89,947	県外48,944	全体138,949
2014年11月	県内75,796	県外46,070	全体121,916

「判断できない」が減少、徐々に意志決定が進む

復興公営住宅の入居意向 ※楢葉町除く



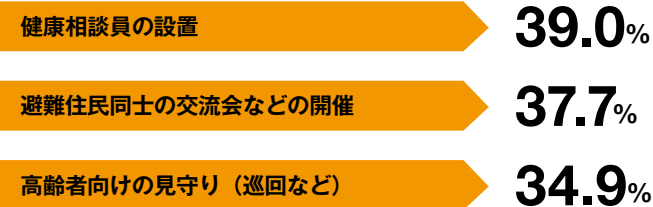
将来的な帰還意向



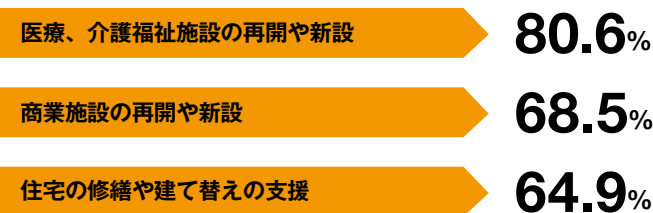
入居、帰還後は医療や商業施設、健康相談、交流支援がポイントに

復興公営住宅や帰還への「積極派」と「消極派」、それぞれに必要な生活サービスや行政支援を探った (2014年調査)

入居後に必要なサービス ※楢葉町除く

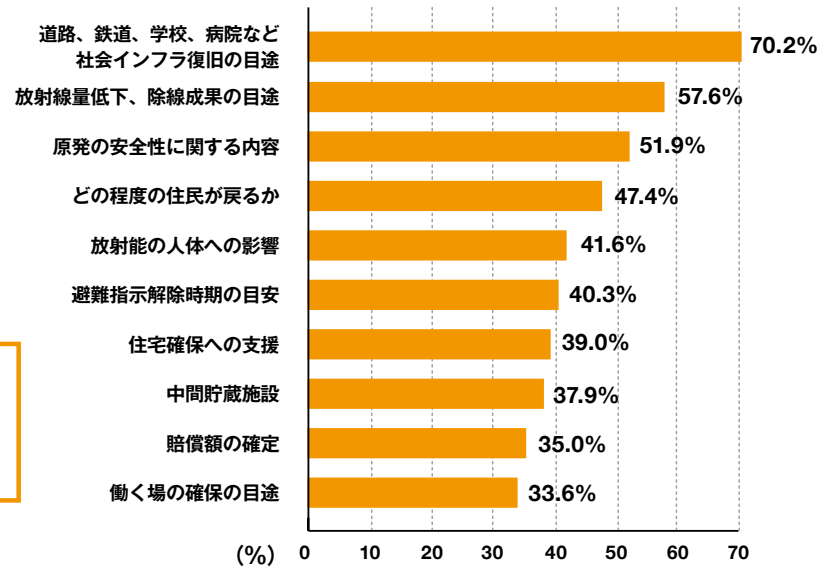


帰還後に希望する行政支援 ※浪江町除く



消極派に
帰還目的の
提示を!

帰還判断に必要な情報]



※上記調査で「現時点で判断できない」「戻らない」の回答者に質問。複数回答

Business
PICK UP
DATA

震災関連 倒産件数

31ヶ月連続
前年同月下回る

2015年1月5日東京商工リサーチ発表
2014年12月は5件と2011年3月以降最小。累計では1,538件。

「僕は無邪気な若者ばかりです。そう話す人の若手林業家が、南三陸町で林業の発展へ向けて奮闘している。町内で270ヘクタールの森林を経営する株式会社佐久専務の佐藤太一さんは、大学で物理学を学び博士号を取得した後、2012年に南三陸町へ帰郷。同社の森林経営計画の刷新に取り組み、新規に2名の技術者を雇用するなど攻めの林業で再スタートを切った。

しかし、木材需要の低迷や輸入材との競争など林業経営を取り巻く環境は優しいものではない。南三陸町内でも、収益を見込めない等の理由で未活用の森林が多いのが現状だ。佐藤さんは「木材生産だけに頼らない持続可能な産業モデルを確立する必要がある」と、自社の経営再建に加え、町の森林資源の付加価値創造へ向けた手をうち始めた。

その一つが、森林管理に関する国際認証FSCの取得へ向けた取り組みだ。環境や社会に配慮した、持続可能な林業経営を行うことは未来へ向けた責任であり、またそれを外部に発信することは、南三陸材の競争力を高めることに繋がる。その必要性を町内関係者へ力説した「無邪気な若者」の働きもあり、現在南三陸町では、森林組合を管理者とした町内3つの民間事業者による森林管理のグループ認証(FM認証)、および製材所や工務店による加工流通の認証(COC認証)の取得申請が進んでいる。順調にいけば今年の夏には認

林業・農業・漁業が
ひとつにつながる

証取得の予定。これを皮切りに町有林を含む町内の他の森林にこの動きを広めていきたい考えた。

業とも連携し、選木のポイントなどを学びながら、自らの手でノコギリを持って木を切る3時間のプログラムなどを開発し、ツアール実施には思わぬ副産物もあった。同じく体験プログラムを提供する漁業や農業との連携が生まれていったのだ。「この町の特徴は、分水嶺に囲まれた中に山・里・海があること。町を訪れる人には、林業の現場である山はもちろんです。町を訪れる人にとっては、その全てに触れて欲しい」と佐藤さん。消費者と向き合うことにより、南三陸らしさや魅力を深めていくのだ。

情報発信の
非営利
プラットフォーム

情報発信を通じて、町や山の再生に取り組んでいるのは、佐藤さんだけではない。製材業を営む丸平木材株式会社は、山さごいん設立の思いを、小野寺さんはこう話す。「一番怖い風化は、外の人ではなく、地域の中では、外の人です。あのとき感じた、生きている実感、人とのつながりの大切さ、自然の恵みと脅威、生き残った私たちだからこそ語れる、本業の豊かさや価値観がある。

山さごいん設立の思いを、小野寺さんはこう話す。「一番怖い風化は、外の人ではなく、地域の中では、外の人です。あのとき感じた、生きている実感、人とのつながりの大切さ、自然の恵みと脅威、生き残った私たちだからこそ語れる、本業の豊かさや価値観がある。

山さごいん設立の思いを、小野寺さんはこう話す。「一番怖い風化は、外の人ではなく、地域の中では、外の人です。あのとき感じた、生きている実感、人とのつながりの大切さ、自然の恵みと脅威、生き残った私たちだからこそ語れる、本業の豊かさや価値観がある。

【宮城県南三陸町】

生産現場と消費者がつながる、新しい林業のかたち

町内グループで
国際認証獲得へ

地域資源を活用して産業振興を、東北のみならず全国の地域が、地方創生のかけ声のもとでその具体策に取り組んでいる。町の面積の77%を森林が占める宮城県南三陸町では、森林資源を活用した取り組みを通じて、山・里・海、そして生産現場と消費者をつなげる新たな取り組みが進められている。



上) 南三陸町観光協会の「まちなか大学」で行った間伐体験プログラム

小野寺邦夫さんもその一人だ。同社は震災で工場が流されたが、1年後には工場を新設して営業を再開。「単なる木材料を行うだけなら大きなリスクや負債を背負ってまで創業しなかった」と話す小野寺さんは、「木の力を伝える」ことを第二の創業のコンセプトにかかげた。見学会等において消費者とのコミュニケーションを強化し、木そのものの価値を伝えている。「木は単なるマテリアルではありません。大自然に生きる命であり、歴史的にも人々の暮らしを精神的にも物質的にも豊かにするかけがえのないもの。それを伝えることが、私たちの使命です。」

本業のかたわら、思いを共有する人たちとの連携プラットフォームとして、「一般社団法人山さごいん」を立ち上げた。他「次産業や教育、芸術や文化など様々なプレイヤーと連携しながら、ツアーイベント、プログラムなどを生み出していく母体となる。「木の力を信じる私たちの思いを、安く大量に求める市場に理解してもらうことは簡単ではありませぬ。林業に限らず、医学や科学などを含めた他業種とも横断的に連携した情報発信が必要だ」とその目的を話す。既に「流域ウォーク」など、いくつものプログラム開発が進められており、今後も地域内外のプレイヤーの参画を期待している。



(左)「実際に山を見て、ストーリーを知ってもらうことで、木材製品などの付加価値も高まる」(右) 株式会社佐久の佐藤太一さん。山で育ち大の自然好き、大学では物理学で博士号を取得した

特集

さらち
更地からつくる新しい町
「宮城県女川町」

千年に一度の まちづくり

人口減少率日本一からの持続可能性への挑戦

津波で町の8割の建物が被災、総務省が2014年6月に発表した統計では人口減少率6.54%と全国一高かった宮城県女川町で、町全体を再デザインする復興事業が進んでいる。

千年に一度といわれる津波の被害に遭い、更地になった土地に新たな町を作る。それは、建物の再建や区画整理といったハード面での大規模事業であると同時に、「地域が将来にわたってどのようにありたいか」というビジョンを、町という形に表現する取り組みでもある。

全国でも類を見ない規模の本事業の、計画とビジョンを追った。

3月には新駅舎も誕生。

「海とともに生きる」町を具現化へ

女川町震災復興まちづくり事業では、土地利用の基本的な方向として、居住地は今回の津波と同等の津波にも浸水しない高さの土地に集約し、低地は産業用地として商業・水産加工業・漁業に活用する、と明確に分けている(図1)。女川町は、東日本大震災で死者行方不明者827名という人口比最大の人的被害を出しているが、復興計画において防潮堤を作らないことをいち早く決定した。海に囲まれた町で海とともに生きてきた町民は、海が見えなくなることを選ばず、その代わりに、津波が来ても逃げられる、建物は失っても人命は失わな

い町を作ることを決めた。現在、女川町の各所では山を切り開いて宅地を整備し、その土で低地を嵩上げる工事が行われている。

一方、JR女川駅を中心とする低層の産業地の整備事業も着々と進んでおり、2015年3月にJR女川駅が開業するのを皮切りに、新施設が次々とオープンする表1、図2。建築界のノーベル賞と言われるブリツカー賞を受賞した坂(ばん)茂氏の設計による新女川駅は、羽を広げたウミネコをイメージしたデザイン。温泉施設と展望施設を備えており、女川観光の拠点となる。新設される漁業体験施設は、津波で流された旧女川駅のデザインを生かして建設される。

住民と来訪者がともに集う 海を生かしたソフトを 取り込む中心市街地

新たな女川の町のにぎわいを創出するとともに、町内の事業再生という点でも注目されるのが、女川駅から海に向かって延びるテナント型商店街だ。2014年12月時点で、飲食店、日用品店など25事業者の参加が決定している。ワークショップやイベントが開催できるスペースも設けられ、住民の集

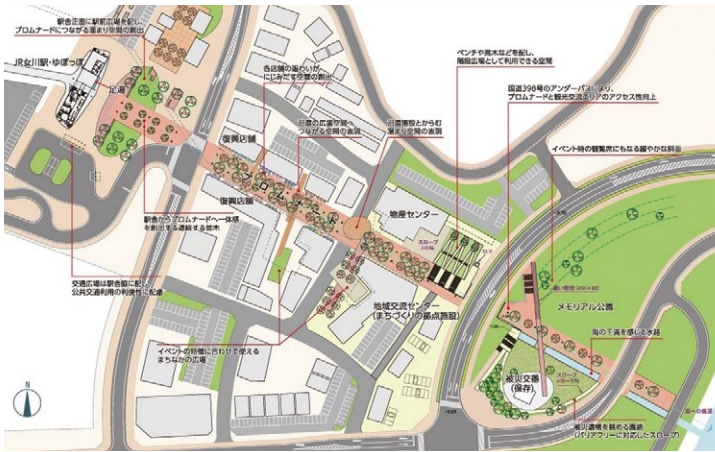


図2: 中心市街地計画 (出典: 女川町復興まちづくり情報交流館)



1 工事が進む女川町。海に面した低層地は公園になる

2-4 2014年3月に行われにぎわいを見た「女川復興祭」。今年は女川駅開業とあわせて3月21・22日に行われる

5 まちづくり会社・女川みらい創業株式会社の近江専務

6 左奥に見えるのが、建設が進むJR女川駅舎

主な中心部施設の開業予定

2015年	3月	JR女川駅開業、 フューチャーセンター開設
2015年	5月	漁業体験施設開業
2015年	年度内	プロムナード (テナント型商店街、地域交流センター) 開業
2015年	年度内	物産センター開業

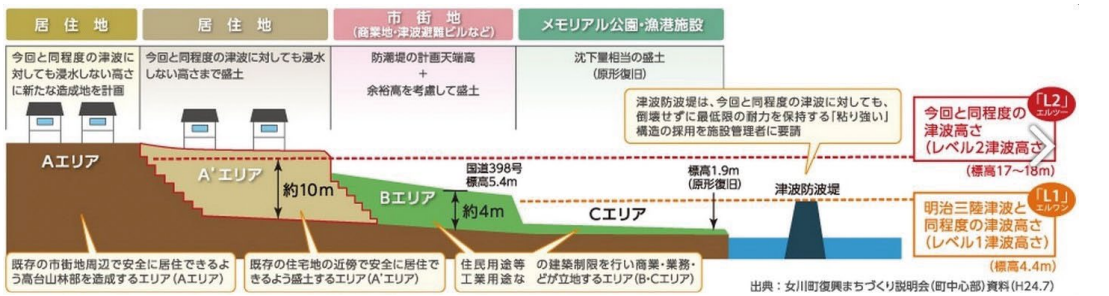


図1: 嵩上げ計画 (出典: 女川町復興まちづくり説明会(町中心部) 資料 H24.7)

う場、来町者と呼び込む場としても活用される。

震災前に1万14人だった女川町の人口は、7千197人(2014年10月31日時点)まで減少した。

商店街を含む中心市街地の開発・運営を担うまちづくり会社「女川みらい創造株式会社」専務の近江弘弘さんは、新たな町のビジョンをこう語る。「直近で定住人口が増えることはないだろうという前提で、人口の新陳代謝ができる町をつくりたいんです。団塊世代の二地域居住、3年間住む若者を生む全寮制高校の設置など、永住ではなくても数年間町に居住する人が生まれる仕組みを作り、人が入れ替わりながら循環することを目指します。その延長線上に定住人口の増加が見えてくるはず。そのために、女川で過ごす時間、女川で体験できることの価値を形にして見せたい」。

その軸となるのは、震災前から女川が持っていたもので、これからも女川が持てるもの、だという。女川のまちづくりは海の存在を最大限に生かすことを基本としており、町内各所に海が見える眺望点が設定される。「獲る・調理する・食べる」の連が体感できる新しい漁業体験施設の開設も、海を生かしたまちづくりを具現化したものだ。商店街にも海鮮を提供する飲食店や鮮魚店など、女川の海の恵みを味わえる店舗の入居が予定されているほか、物産センターには、津波被害に遭い現在は仮設店舗での営業を続けている「マリナール女川おさかな市場」が新しい形で移転することになる。

2015年3月21日、女川駅の開業に合わせて、不通となつてい

たJR石巻線の浦宿〜女川間が開通する。同年6月までには陸前小野〜高城町間が復旧しJR仙石線が全線開通する予定で、仙台から女川への交通アクセスが格段に向上する。駅周辺にコンパクトに魅力が詰まった中心市街地は、旅行者にとって利便性が高く、来町者の増加が見込まれるだろう。そこから長期滞在者を生むことができるかどうかは、訪れた人の期待を上回る体験価値を提供できるかに懸かっている。

「60代は口を出さず、50代は 手を出さずに支援する」。 次世代が中心と なったまちづくり

被害の大きかった市町村の中でも群を抜いてスピードの速いまちづくりは、どのように実現へ向かったのだろうか。近江さんによれば、女川町の復興計画が進んだ理由は「防潮堤は作らない」と意思決定したこと、みんなが町の復興を願っている時期にいち早く土地の権利を放棄させ区画整理を進めたこと、継続的に話し合う場が設けられていることの3点だという。

特にポイントとなるのは「話し合う場」だ。「女川町復興まちづくりデザイン会議」が設けられ、2014年10月までに15回開催されてきた。有識者とともに町長から住民までが参加し、町のゾーニングからインポルとなる建造物のデザインまで、町全体の方向性を話し合っている。女川のまちづくりには小中学生も参加し、30代・40代が中心となつて動き、町の年長者から、「60代は口を出さず、50代は口を出してもいいけど手は出さず」と言われた上の世代が支えているのが特徴だ。震災後の2012年に初当選した須田善明町長も42歳と、まちづくりの中心になっている人々と同世代だ。

現在56歳の近江さんは言う。「まちがっけり上げられるのにあと5年かかります。継続的に人を呼び、株式会社女川町を事業として成立させるのは、それからが本場のスタートライン。だから、持続可能な町の仕組みを作り次世代に引き継いでいくことが自分たちの世代の役目なんです。女川は津波で壊滅的な被害を受け、人口減少率も全国で番高い。その女川で持続可能なまちづくりができるなら、全国どこでもできるという事例になるでしょう」。

平成の大合併でも独立の道を選び、町民のアイデンティティの強い女川町。女川ならではのまちづくりのビジョンを携え、津波の被害から再び立ち上がるうとしていく。

観・食・遊

ravel



vol.11 福島県

みずほフーズ ほんのりピーチ

酒との相性は天下無敵。思わず口説きたくなるピーチ姫



ほどよい酸味と甘みはヨーグルトにも合いそうだ。自由な発想で楽しみたい。



「気立てが良い」、「チャーミング」、「私はあなたのとりこ」。これらは私が妻を口説いた際のセリフではない。桃の花がもつ花言葉である。

みずほフーズの「ほんのりピーチ」は、太陽をいっばいに浴びた福島県産の美味しい桃を、無添加、無着色にこだわり、素材のもつ味を堪能できる昔ながらの方法で、一つひとつ丁寧に手作りしている漬物だ。大胆にカットされたボディはしそでピンクに染められ、その美しさに思わず手を伸ばしたくなる。口にするとポリポリとした歯ごたえが心地よく、同時に桃の甘酸っぱさが奥ゆかしく広がる。初めて知ったときはデザートとして楽しむだけの一品かと思っていたが、実際に味わってみると日本酒にもよく合う。そのルックスと、誰にでも合わせ

られる気立ての良さに、もしこれが女性だったら間違いなく口説いているだろうと妄想してしまうのはやむを得ない。

古来より食品の保存法として伝えられ、その地域の風土や習慣が反映される漬物は、食文化の象徴とも言える。漬物といえば大根、キュウリ、野沢菜など、野菜を連想しがちだが、地元の名産品である桃を、一年中味わえるようにと漬物にする自由な発想と、ふるさとの味を大切にする気持ちからこの愛らしいピーチ姫がうまれたのだろう。

そういえば桃の花言葉には「天下無敵」というものもあるそうだ。私も妻の巨大な桃の下に敷かれたいように気をつけたい。(K)

<http://www.mizuhofoods.com/detailed.php?n=1> (問) 024-547-3888



vol.3 宮城県 松島町

豊饒の海の底力

クルージングでとれたての牡蠣に舌鼓

日本三景に数えられる特別名勝・松島の魅力をより深く堪能しようと、遊覧船で湾内クルージングに出かけた。松島港を出発すると間もなく、右に左にユニークな形の島が表れる。湾内には大小260余の島々が連なり、乗客たちはシャッターチャンスを逃すまいと大忙しだ。仁王像を思わせる風格の仁王島、4つの洞門に大波が打ち寄せると鐘を打ったように聞こえる鐘島など、2つとして同じ形の島はない。波間からは牡蠣や海苔の養殖棚も見える。

船はやがて湾内で2番目に大きな桂島に到着した。たった4つしかない有人島の1つだ。港から少し歩くと、少し生臭いような強い磯の香りが鼻をつく。牡蠣処理場だ。水揚げされたばかりの牡蠣が大きなカゴに盛られている。海中の泥にまみれて、店頭に並んでいる姿とはだいぶ様子が違う。でも、これこそが新鮮さの証拠。水揚げされた牡蠣はこの後、体内の排泄物などを流すため、最低でも丸一日、きれいな海

水の入った水槽につけて浄化され、私たちの食卓に向けて出荷されるのだ。

処理場前を後にして再び船に乗り込み、次に目指すは塩釜港。港からほど近い「塩竈かき小屋」で浜焼き牡蠣をたっぷりいただく待望の昼食タイムだ。大きな鉄板のあるテーブルを囲むと、前日に水揚げされたばかりの新鮮な牡蠣が、「ジュッ」と音を立て、鉄板に勢いよく盛られる。

殻を開けると、ほのかな湯気を立て、プリッとした白い身が現れた。殻にたまったお汁と一緒に一口でいただく。口の中にフワッとした旨味が広がる。不思議なことに、身の大きさは必ずしも殻の大きさと比例しない。殻いっばいに大きな身が入っていると、「やった、当たり」と、嬉しさが倍増する。

「美味しい食を求めて来てくれることが復興の応援になるんです」。土産物屋で聞いた地元の人の言葉に励まされ、早くも次の旅に思いを馳せる。



vol.11 秋田県 仙北市田沢湖

「乳頭温泉郷 鶴の湯」

江戸時代のひなびた湯治場そのままに

こんもりと雪が積もる JR 田沢湖駅から、乳頭温泉郷へ車を走らせると、標高が高くなるにつれて雪はどんどん深くなった。雪山は白一色、キラキラと光る樹氷に目を奪われていると、行く手に「本館鶴の湯」と書かれた簡素な木の門があらわれた。その先に広がったのは、これは墨絵の世界だろうか？ 昔話の 1 ページに迷い込んだような風景には、ひなびた山の湯治場の雰囲気そのままに残されていて風情満点。こんな秘湯がまだ日本に残っていたなんて。

車を降りて雪かきされたばかりの小道を歩くと、江戸時代のものだという茅葺屋根の本陣からはランプの灯りがもれてくる。湯の沢にくるくる廻る水車の向こうには、温泉棟の湯小屋が。そこまで

ほんの数分なのに、歩く間に髪がパリパリと凍りついてしまう。ふと見ると本陣の窓の外にはアイスクリームが置いてある。この季節、気温はマイナス5℃を下回り、外気は冷凍庫のように寒いのだ。もはやカチコチに凍りついてしまいそうな体で思うことはただひとつだけ、「一刻も早く温泉につかりたい、あたたまりたい」。

鶴の湯には白湯、黒湯、滝の湯、中の湯と4つの源泉が湧き、それぞれ効能も肌触りも違うから、もちろん全部入りたい。はやる思いで温泉棟へ急ぎ、まずは内湯の黒湯へ。子宝の湯、ぬぐだまりの湯である黒湯につかれれば、じわじわと体の芯からぬくまって、しびれるような、救われたような。「はあー、ぬぐだまる」と秋田弁を真似てから、今



度は2つある露天風呂で雪見露天と洒落込もう。乳白色のにごり湯に体をゆだね、向かいの山を見上げると、風に吹かれた雪が舞い上がり山がゴォゴォと鳴った。気温はこんなにも寒いのに、首から下はぽかぽかでいつまでも湯から出たくない。この不思議な感覚は体験してみないとわからない。雪国の冬、温泉がどれほど体に沁みるものなのか。ノスタルジックな山の宿でそれをしみじみと味わった。

(問) 0187-46-2139

ピックアップNEWS

東北復興新聞 WEBサイトから

東北復興新聞WEBサイト (<http://www.rise-tohoku.jp>) では、紙面に掲載した以外にも復興現場の記事が掲載されています。

通常記事の他にもイベントやツアー、助成金などの情報も満載。ぜひご覧下さい。



リクルートキャリア、「リクナビNEXT」で被災地の職員採用を支援



被災地での社員研修 企業人が現場を訪れる意義とは



【福島県相馬市】豊かな漁場と若い漁師の海 福島漁業の今と未来